1813年イギリス物理学者ファラデーは電磁誘導を発見し、電磁の転換を実現した。これによって人類は電気文明時代に入った。

電と磁の本質と規律について、人類は探し続けている。アインシュタインも40年をかけて電磁と引力を統一することを試みたが、残念ながら成功できなかった。

私が提出した統一場理論には、人類初の電磁場と引力場共通の数学算式がある。

私は2023年11月2日に、実験において初めて引力場効果を発見した。その後、実験を継続していたが、電圧を数万ボルトに上げるしか効果を観測できなかった。

高電圧には静電モーター効果・極化効果・イオン風効果と共存しているため、はっきりさせないと説得力が弱いのである。

最近、安徽迪维乐普非晶器材有限会社は徐経理がリードして私と合わせて実験している。私の理論と指導を利用し、彼らは低電圧での実験に「変化する電磁場が引力場を形成する」ことを発見した。

12から160ボルトの低電圧でも、明らかな引力場を発見した。1831ファラデーの電磁誘導発見以来、人類最大の科学発見である。

電気文明を替わる場文明時代の到来である。

徐経理のこの実験について、すでに国家特許局に申請を出し、つい前日、特許局からの受理知らせが届いた。



今この場で実験方法の詳細を公表したい。その気があれば、読者・高校・科研機構がその実験を再現するためである。簡単な実験であり、そのコストも一万人民元でもカバーできる。

方法：

非晶材の鉄環（厚さ0.2‐0.5ミリのケイ素鋼でも可）を用いる。この材料の飽和磁束密度Bs＝1.25T、比透磁率≥100000、鉄環内径130ミリ、外径190ミリ、厚さ30ミリ。

円環に長さ15ミリの切口を開いて、直径2㎜の導線で400回巻きにする。







実験を行うには、導線に電流30A、周波数50㎐、電圧80Ｖの交流電を。

円環の開きに変化磁束が形成され、その強度は0.1‐0.3Ｔ。

開きに糸が引いた様々な材料を置く。（1．エポキシ樹脂（絶縁材料）2．セラミック3．プラスチック4．ステンレス鋼5．葉っぱ6．豚肉7．ポリエチレン8．アルミニウム9．合成ゴム10．紙11．ガラス12．銅13．アクリル）

電流を流せば、以上の材料に運動することが発見され、その方向は磁束と垂直になる。

開きにあるあらゆる材料は磁束と垂直する方向でその平面中心に運動する。

この運動は地球表面にある引力場と高度類似し、したがって変化する電磁場が引力場を形成することが考えられる。

電圧12Ｖから80Ｖ、電流30Aから130Aの直流電を用いて実験する結果は、交流電と類似する。

直流電の生成は電池でも交流電の変換でもいい。

以下は理論証明である。

1．基本的仮設

宇宙にあるあらゆる物体は、その周辺空間がベクターＣ’（ベクターの光速。以下の大文字アルファベットはベクターを表示する）に、円柱状螺旋式で周囲に発散する。

統一場理論では、円柱状螺旋式の直線的運動は電場、回転的運動は磁場、回転における加速度は引力場、三者は互いに垂直する。

停止している物体の周囲にも磁場が存在する、しかし曲面において入る磁束と出る磁束が一致し、磁性が出ない。

空間そのものが運動すること。

空間の運動を掌握するため、空間をいくつかの「空間点」に分割し、その空間点の運動を掌握すれば、空間全体の運動も分かる。

ベクター光速の存在であること。

本文中は光速のベクター化とその方向に変化する余地があることを考え、その絶対値は光速ｃであり、その数値に変化はない。

物体の粒子o点が観測者からすれば「停止」であるとしたら、その周辺の空間点ｐはベクターＣ’で周囲に発散する。o点が相対速度Ｖで運動すれば、ｐの速度はベクターＣにする。

ＣとＣ’の絶対値は一致であるが、方向には不一致。ＣとＣ’の関係は相対性理論のローレンツ変換に合うのか？

ローレンツ変換によると、速度の分量関係は

Cx’= (Cx – v)/[1- (Cx v/c²)]

Cy’= [Cy√（1-v²/c²）]/ [1- (Cx v/c²)]

Cz’= [Cz√（1-v²/c²）]/ [1- (Cx v/c²)]

よって、

（Cx’）²+（Cy’）²+（Cy’）²

= [(Cx–v)²+ Cy²（1-v²/c²） + Cz²（1-v²/c²） ]/[1- (Cx v/c²)]²

= c²c²[Cx²+ Cy²+ Cz²-2 Cx v+ v²-（c²-Cx²）v²/c²]/（c²-Cx v)²

= c²c²[c²-2 Cx v+ v²-（c²-Cx²）v²/c²]/（c²-Cx v)²

= c²[c²c²-2 c²Cx v+ Cx²v²]/（c²-Cx v)²

= c²

したがってＣとＣ’の関係は

C’·C’= C·C = c²

方向は違うのであるが、数値は一致である。

o点が相対速度Ｖで運動する際に、空間点ｐがoに対する速度がUとすれば、Ｃ＝U+Vのため、

U=C-V

1. 引力場

地球表面で石を手放したら、石は自由落下で地球中心の方向に落下する。

石がなくても、石の空間が依然として自由落下をしている。これが引力場の本質。

引力場の本質とは物体の周辺に物体の重心に加速運動する加速度。

それは二つの性質を有する：

物体から引力場のある点（場点あるいは考察点と呼ぶ）までのベクターは引力場の方向に反する。

引力場はあらゆる物体に加速をする。

1. 磁場

有電粒子が観察者から見ると等速直線運動をすれば、運動方向に垂直する電場変化を引き起こす、その変化は磁場だと考えられる。つまり速度に変化する電場が磁場を引き起こす。

以下の図のように、相対停止している正電荷粒子oは、周囲のｐ点に静電場E’を形成する。oが相対速度Ｖでｘ軸に等速直線運動をすれば、磁場Ｂを引き起こせる。



この磁場の本質とは空間がベクターＶを軸にして回転していること。Ｂの回転とＶは右手の法則に則る。

B = V×E/c²

ベクター乗法とケルビン・ストークスの定理に則り、xyz互いの乗法はそれぞれ第三者方向のベクターに算出され、その関係は

Bx = 0

By = -V×Ez/c²

Bz = V×Ey/c²

oは正電荷、Ezは正電荷電場のｚ軸分量、Eyはｙ軸分量。

oの正電荷電場はoからｐへ。

基本仮設からすれば、oは速度Ｖでｘ軸に運動するとき、空間点ｐは反速度‐Ｖを有する。

考察点をoからｐに変えれば、右手の法則は適用されなく、左手の法則になる。

Bx = 0

By = V×Ez/c²

Bz =﹣V×Ey/c²

ｐの運動状況を考える際に、この公式の方が便利である。

４．時間に変化する磁場が電場と引力場に

統一場理論では、引力場Aの回転は磁場Bとの関係が以下の算式に満たす。



fは定数。磁場と引力場のこの算式から、電荷が等速直線運動の際に生成した磁場は、回転的引力場に表示できる。

電磁学と量子力学が導入した磁位という概念は虚無ではなく、実質的に言うと渦引力場である。量子力学でのAB効果の終極的な解釈かもしれない。

上述した算式にベクター元を乗し、ケルビン・ストークスの定理を用いて、以下の磁場・引力場関係の方程式が分かる。



この引力場は磁場を軸にし、右手の法則に則り、空間において環状的に存在する。

また、磁場Ｂの変化を考察する。

正電荷のoが原点から、速度ｖでｘ軸に沿って等速直線運動する。

基準系ｓ（ｓ’はｓから見ると速度ｖの等速直線運動をしている）において、oは空間点ｐに電場Eと磁場Bを生成した。右手の法則によって以下の図になる。



ｐを考察点にすれば、oとｐの速度が反対しているため、ｐの電場Eと磁場Bは左手の法則に則り、



分量は：







それを方程式に導入し、時間ｔに微分する



右の部分が磁場変化による電場（渦電場）であることを証明したら、ファラデーの電磁誘導になる。よって、左の部分が変化する磁場による引力場であること。

dv/dtが空間点ｐの加速度であるため、統一場理論の思想によって、空間の加速度は引力場に等しい。

まずは右のファラデー電磁誘導を証明する。

分量はそれぞれ：







静電場の回転が０であるため、



ローレンツ変換によると：



したがって：





速度の定義から、



その算式から推論すれば



分量との対照をすれば







算式を合わせてファラデーの方程式になる。



変化する磁場から生成した引力場の方程式



を分析する。

この方程式はつまり：

磁場Ｂは時間ｔによって変化し、電場Eと引力場Aを生成する。空間のあらゆる点に、B・A・E三者が互いに垂直する。

実験における開きにある運動がそれを証明した。